

第35回自然保護委員総会（鳥取県大会）報告

10月15～16日、第35回（平成23年度）日山協自然保護委員全国総会が鳥取県山岳協会主管のもと、鳥取県、西伯郡大山町、山陰中央新報社、中海テレビの後援を得て、西伯郡大山町「ホテル大山しらがね」で、全国（23都道府県）から107名の委員と自然保護担当者を集め開催された。

総会開催に先立ち「全国自然保護委員長会議」が開かれ、総会議事の進行と次期開催県について事前協議された。

鳥取山協大西一俊副会長の開会宣言で開始された総会は、まず主催者側神崎忠男会長より、カトマンズ宣言を引用し、アジアには自然保護活動をしなければならない地域が沢山あり、登山が低迷化・多様化しているなか、アジア全体へも広い視線を向けようとする。石倉昭一自然保護委員長より、日山協の公益法人化の動きに合わせ、自然保護委員会も転換期を迎え、公益性を取り込んだ活動の展開をこれからは迫られることになる、今日的課題を提起し挨拶。さらに主管代表河合登会長より、大山は高さ約1700mであるが、岳人の意欲をかき立て、愛され、恐れられもした山である。古く出雲風土記や国引き伝説にも登場し、修験道の地としても栄えた。昭和40年代のブームから山岳自然が荒廃した反省から、破壊の現状を踏まえた自然保護憲章が創られ、清掃や植生回復が定着化してきたとし、紅葉には少し早いが大山の自然を楽しんでと挨拶。小西正記大山副町長から豊富で良質な水がお国自慢の大山へようこそと歓迎の挨拶をした。

議事に入り、まず愛媛総会以降の常任委員会の活動報告（毎月の委員会や研修会等）、山岳団体自然環境連絡会（6団体）で連携したトイレ問題の意見書や「山はみんなの宝」、「山の鳥獣目撃レポート」の説明に続き、「各都道府県山岳連盟（協会）活動状況等について（情報交換）」に進み、あらかじめ提出された資料に基づいて提案・報告がなされた。

この提案・報告では、裸地化、荒廃化登山道、トイレ、入山料徴収など、山のオーバーユースへの対策活動のほか、山

のマナーや山岳環境保全への啓発活動、森林づくり活動、稀少動植物の保護保全活動、水場の水質調査や樹木の立枯れ調査、携帯トイレの普及活動等々、各岳連が地域の特性に応じて積極的に繰り返している山を守る諸活動が報告された。

しかし、こうした旺盛な環境保全意識とは裏腹に、自然保護委員の登録数や士気の低下など悪化傾向に自然保護活動の先行きへの憂を訴える岳連もあった。また、シカの食害や特定外来植物の侵入など生態系に係る被害や、自然環境の悪化を認識しつつも、具体的な手出しができない歯がゆさを訴え報告もあった。一方、自然保護に関する活動は一岳連には荷が重いなか、地域や行政と連携して成果を挙げた事業、各種補助金を受けて事業の継続を図っている活動も報告され、活動の進め方の良き事例を示唆した。

討議のあと、大会スローガン「活動の輪を広げ、緻密な積み重ねで前進しよう」を採択した。平成24年度の開催予定地に北海道が満場の拍手で了承され、議事を締めくくった。

議事のあと、大山の植生回復活動に永年取り組んできた乾刻弘氏（大山の頂上を保護する会副会長）により「大山山頂の保護 30年のあゆみ」と題する基調講演を聴取。永年の植生回復の経緯について実践的な講演内容で、翌日の大山山頂視察登山の植生観察の下知識を得た。

第二日は曇り空の中、大山山頂視察登山と大山寺周辺の清掃の2コースに分かれエクスカージョンが行われ、大山地区の自然保護活動の状況について実地に見聞し、下山とともに、総会が解散となった。

最後に、鳥取県山岳協会をはじめ、総会を主管・ご後援頂いた関係各位に、深くお礼申し上げます。

（自然保護常任委員会 松隈 記）



総会会場にて



挨拶する神崎会長



大山頂上へ